技術とアイデアで社会奉仕する多田プラスチック工業（株）工場見学と前田社長の講演 ～第12回ATAC社長懇談会記録～

ATACの行事として定着した社長懇話会の第12回目を、秋晴れの平成20年10月21日に開催した。企業経営者18名の参加を得て、多田プラスチック工業㈱の本社工場（藤井寺市）を見学した後、前田政利社長の講演をいただきました。

◆会社概況

1919年セルロイド、エボナイトの加工で業を起した。戦後他社に先駆けてプラスチックの射出成形に着手され、現在のコア技術となっている。また、冷蔵庫扉など断熱材を活用した製品を製造している。更に独自に遠心ポンプ、ダイアフラムポンプを開発・量産化されている。従業員191名、年商78億円（2007年）、優良中小企業として多数の表彰をうけている企業です。

◆工場見学

40トンから1,600トンまでの射出成形機で、小物から自動車用フェンダーなど大物まで生産しており、射出成形のデパート的事業展開をしている。またプレス成形した薄鋼板とウレタン発泡技術を組み合わせた、冷蔵庫用扉、風呂蓋など断熱製品の一貫製造ラインが稼動しており、圧巻でした。またプラスチック製ポンプがセル生産方式で組立てられているのを見学しました。

工場内は良く清掃されており、また多くの従業員より丁寧な挨拶をされ気持ち良く見学できました。

▲講話する前田社長

◆前田社長講話

大阪科学技術センター会議室に場所を移し、前田社長より講話をいただいた。

社長在位20年間の前半10年間は「体力強化」、後半の10年間を「体質強化」と捉え経営に当たられた。

「体力強化」では人材の強化を図るため、費用は高かったが大手の人材会社を利用して採用し、その時の人材が現在中枢となって活躍されている。

また、老朽化した装置の総入替えを3～5年で実行された。償却費増、資金繰り、二度にわたるオイルショックなど苦しかったが、それを乗り越え現在の大きな力となっている。

「体質強化」では、「理念･ビジョン作り」「組織･人事制度作り」そして「外部の声、考え方の採り入れ」の強化を図られた。

これらの成果として（1）射出成形への特化、（2）ウレタンの発泡化・ノンフロン化による高断熱冷蔵庫用扉・風呂用蓋の一貫生産、（3）プラスチック製ポンプの自社開発が確立された。

海外進出については、何のために進出するのか、人材が分散してよいか、日本との文化の違い、等を考慮して進出しないと決断したこと、一抹の不安はあったが、ムード（第三者の声）によって動かされない、不安を態度に表さないように努めたなどの経験を紹介された。

結びとして、ネアンデルタール人（体力は優れているがしゃべれない）でなくホモサピエンス（力は強くないがしゃべれる）が存続して現在に至ったのは、変化に対応できたからで、「自社の強みの探求」「自ら変り、変化に対応」することの重要性を述べられた。

▲前田社長の会社概況説明

◆懇親会

講話の後、懇親会に移り、多田プラスチックの前田社長及び幹部との歓談、参加者同士の歓談が交わされ、相互の面識を得、情報交換も行われた。主催者側として参加頂いた経営者の方々にお役に立てられたものと自負しております。

（宮本記）